

『雨月物語』が映し出す現世

1. 原発に関する不条理と被災者たちの状況

福島原発事故は、原発推進政策の変更を迫るに十分な理由を示した。そして、世論はそれ以来一貫して 60%以上が、脱原発を望んでいることを示している。しかし、安倍首相が率いる自公政権は原発推進政策を維持し続けている。また、経済政策においては、将来につけを回すバラマキ政策を無軌道に推進して目先の人気取りに終始し、そのことが一般庶民からの高い支持を得ている。森友・加計問題に象徴するネポティズムなどの不正も、一般庶民には何ら問題とされていない。

昨年 11 月に柏崎刈羽原発 6・7 号機の新規制基準適合性審査書（案）に対するパブリック・コメントに意見提出をし、今年 8 月 4 日期限の東海第二原発の、同じく新規制基準適合性審査書（案）に対するパブリック・コメント提出に向かって現在作業中である。東京電力は、実質破たんしているけれども政府から資金を注入されてようやく生きている、そして、政府から借りた金は今後 30 年間かけて 16 兆円を返すという。そのために、柏崎刈羽を動かすことも稼ぐ重要な手段だという。そして、日本原電の東海第二原発は、今後安全対策に 1740 億円を要するが、その資金を銀行から借りるための債務保証を東京電力と東北電力に依頼すること（東電に 80%依頼）が、新規制基準適合性審査合格の条件になっている。理屈の通らないことがぐるぐる回っている。

2. 不条理を表現する文芸

分かり切った理屈を、聞く耳持たない確信犯の権力者に発信していてもむなしい気持ちに襲われることは避けられない。そういう気持ちを理解し、癒してくれるのは、まったく違う世界で人の感性を受け止めてくれる文芸の世界である。

『雨月物語』、中でも「浅茅が宿」はぴったりだった。

まず、その舞台、下総の国葛飾郡真間の郷（現在の千葉県市川市真間）の記述が、原発の避難区域に指定されて無人地帯になった福島県浜通りの地域を連想させる。

此年享徳の夏、鎌倉の御所成氏朝臣¹、管領の上杉と御中放（さけ）て、館兵火に跡なく滅ければ、御所は総州（下総の古河）の御味方へ落ちさせ給ふより、関の東忽に乱れて、心々の世の中となりにしほどに、老たるは山に逃かくれ、弱きは（若年層は）

¹ 鎌倉公方・足利成氏、関東管領上杉憲忠・憲実父子と不仲で、憲忠を殺したことから戦乱が起こり、30 年間関八州は乱れた（享徳の乱）。足利成氏は鎌倉へ入ることができず、古河公方となる。

軍民にもよほされ（徴発され）、「けふは此所を焼ばらふ」、「明（あす）は敵のよせ来るぞ」と、女わらべ等は東西に逃げまどひて泣かなしむ²。

「浅茅が宿」の女主人公宮木は、このような環境にさらされても、都へ商いに出かけた夫・勝四郎を辛抱強く待ち続けた。しかし、勝四郎はひとたび帰りかけたが、乱世のこと、道中、木曾の真坂峠で追いはぎに遭い、無一文になって近江に引き返さざるを得なかった。6年後に勝四郎が帰ってみると、荒れた家がありそこでうたた寝するとやつれ果てた妻が現れて、さめざめと泣く。お互いその後の境涯を語り合っても寝たが、翌朝起きてみると妻はすでに死んでおり、昨晚の妻の姿は、物の怪が化けて生前の妻の姿を見せたものであった。

3. 現在の被災者たち

ある日突然、他律的な事情で幼児を連れて住み慣れた街を離れ、母子家庭となって異郷に住まいを乞い、その住まいは1年ごとの更新で古い公営住宅をあてがわれ、それも2017年3月には家賃補助を打ち切られて、路頭に迷うという運命に曝されている人々が、現在われわれの目の前に多数いる。

他方、政府や地元自治体は帰還政策を進め、被ばく量20mSv/yの地域は帰還可能として行政サービスを提供している。しかし、福島浜通りの自治体の帰還率は10%台が多い。しかも、60代の人びとが中心で、行政サービスが必要な時だけ地元に戻り、日常は近隣の避難住宅に住んで二重生活をしている人たちも多い。そして、今そういう浜通りの町々に新築の単身者用借家が多く建てられている。原発関連の労働者が一時的な住まいとして住みつきつつある。そのような人々が2000人という規模で、元からの住民帰還者の数を上回っている。つまり、帰還ではない“復興”が進んでいる。

正常な言葉による話し合いのチャンネルが断絶した世の中になった今、狐狸や妖怪が徘徊しているとしか理解できない様相を呈している。

(2018年8月4日 哲)

² 上田秋成作、長島弘明校注『雨月物語』岩波文庫、2018年、p.67